

令和3年度病害虫発生予報第6号

令和3年8月4日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病（穂いもち）	平年並	やや少ない
		紋枯病	—	平年並
		セジロウンカ	—	やや少ない
		トビイロウンカ	—	少ない
		斑点米カメムシ類	—	平年並
		コブノメイガ	—	少ない
		フタオビコヤガ	—	少ない
	ダイズ	紫斑病	平年並	平年並
		ハスモンヨトウ	平年並	やや多い
		カメムシ類	平年並	平年並
果樹	ナシ	黒斑病	—	平年並
		ハダニ類	—	やや多い
		シンクイムシ類	平年並～やや早い	平年並
	カキ	うどんこ病	平年並	平年並
		炭疽病	平年並	平年並
		カキノヘタムシガ	やや早い	平年並
果樹共通	カメムシ類	—	平年並	
野菜	ネギ	軟腐病	平年並	平年並
		白絹病	平年並	平年並
		黒斑病	—	平年並
		ネギハモグリバエ	—	平年並
		ネギアザミウマ	—	やや多い
		シロイチモジヨトウ	平年並	やや多い
		ナガイモ	炭疽病	やや早い
	ナガイモコガ		平年並	平年並
	ハダニ類		平年並	やや多い
	キャベツ・ブロッコリー	シロイチモジヨトウ	平年並	平年並
ハスモンヨトウ		平年並	やや多い	

気象予報（抜粋）

1 か月予報（7月31日～8月30日：7月29日 広島地方気象台発表）

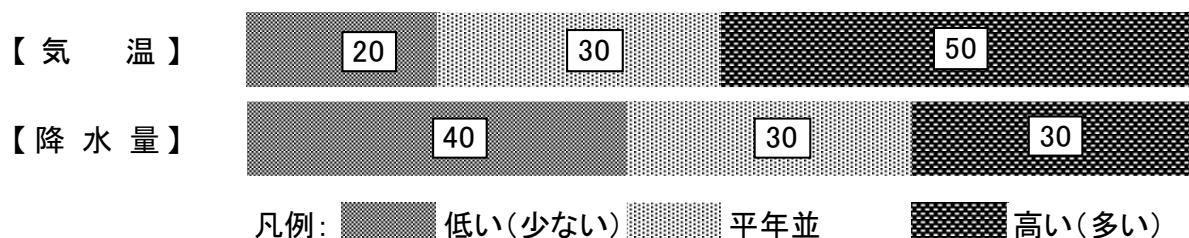
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

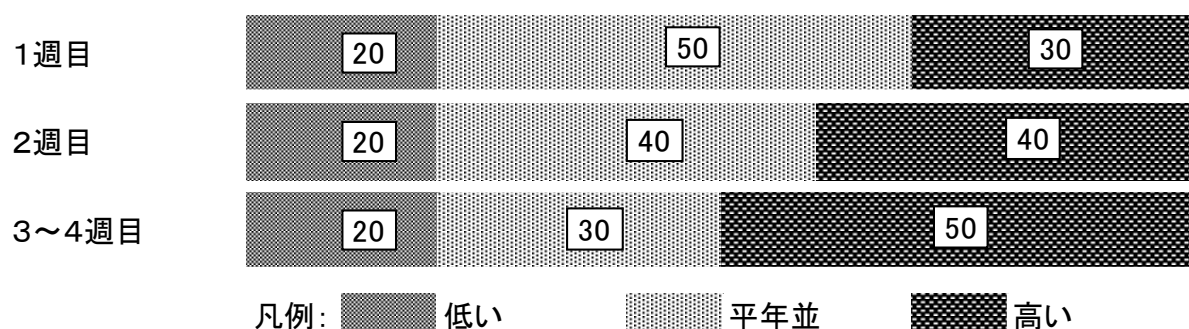
向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、高い確率50%です。3～4週目は、高い確率50%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[イネ]

1 いもち病（穂いもち）

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域
発生時期 平年並
発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の葉いもち発生ほ場率は、6.0%（平年：15.9%）と平年よりやや低い。

イ 7月下旬現在、水稻の出穂期は、平年並と見込まれることから、本病の発生時期は平年並と予想される。

ウ 向こう1か月の気象予報から、本病の発生はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 穂いもち防除は予防防除を基本とする。なお、中間地～山間地等の葉いもちの発生が多い地域では、穂いもちの発生が懸念されるため、防除を徹底する。

イ 粉剤又は水和剤を使用する場合は、穂ばらみ期及び穂揃い期に散布する。なお、降雨が続く場合は、雨の止み間をみて防除を行う。この場合、散布後から降雨が3時間程度なければ、防除効果は十分にある。

ウ まだ出穂していない中生品種などにおいて、粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して湛水散布する（湛水散布にあたっては、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項などを確認するとともに、止水期間を1週間程度とする。また、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努める）。

エ 「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、「きぬむすめ」などのいもち病に弱い品種の栽培、窒素肥料の多施用、遅植えなどの条件では特に発生しやすい。

オ 平成26年にストロビルリン系薬剤耐性菌の広域発生がみられなかった地域では、平成30年より本系統薬剤の本田地上散布剤及びヘリ防除剤の再使用が可能である。ただし、耐性菌の再発生を防ぐために、本系統薬剤の同一年における連用と採種ほ場及びその周辺ほ場における使用を控える。

カ 葉いもちの追加防除を行ったほ場では、農薬の総使用回数を超えないよう十分注意して穂いもち防除を行う。

2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月2日現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における発生は、やや多い。

イ 防除効果の高い育苗箱施用剤が普及している。

ウ 向こう1か月の気象予報より、本病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

病勢進展が衰えず出穂後の防除が必要な時は、病虫害防除指針などを参考にして追加防除を行う。

3 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、予察灯への総誘殺数は平年並である。

イ 7月30日現在、現地ほ場における発生は平年よりやや少ない。

ウ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年よりやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

要防除水準（成幼虫数10頭/株）を超えているほ場では、病虫害防除指針などを参考にして、粉剤などで直ちに防除を行う。

4 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域	平坦部（特に沿岸部）
発生量	少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、予察灯への誘殺は認められていない。

イ 7月30日現在、現地ほ場での発生は認められていない。

ウ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年より少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 現在、本種を対象とした防除は必要ない。しかし、本種の発生はほ場間差が大きいいため、ほ場における生息密度に注意し、今後の病虫害発生予察情報を参考にする。

イ 8月中旬頃の要防除水準は、成幼虫数1頭/株である。要防除水準を超えた場合は、病虫害防除指針などを参考にして、粉剤などで防除を行う。

5 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、アカスジカスミカメの予察灯への誘殺数は平年よりやや少ない。

イ 7月30日現在、早植え、極早生品種等、既に穂揃い期を迎えた水田における本種の発生は平年よりやや少ない。

ウ これまでの発生経過及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 水田周辺の雑草地、畦畔などのイネ科雑草はカメムシ類の増殖源となるので、適正な管理を行う。

・早生品種等、7月下旬～8月上旬に出穂するほ場

出穂20日前頃に畦畔等の草刈りを行っていないほ場では、穂揃い期から乳熟期に草刈りを行い、その直後に、水田に追い込まれたカメムシ類を粉剤、水和剤などで防除する。

・遅植えほ場、中生品種等、8月中旬に出穂するほ場

イネの出穂20日前頃及び出穂期にイネ科雑草の草刈りを行って、カメムシ類の発生源を少なくする。ただし、イネの出穂期以降に、穂を付けたイネ科雑草の草刈りを行うと、雑草地で増殖したカメムシ類を水田に追い込むので、イネ科雑草が穂を付ける前に草刈りを行う。

イ 水田内で穂をつけたヒエ類はカメムシ類の発生を助長するので、見つけ次第抜き取る。

ウ 粉剤、水和剤などを使用する場合は、穂揃い期から乳熟初期に防除を行う。

その後も発生が多い場合は7～10日間隔で1～2回の追加防除を行う。

エ アカスジカスミカメが優占する水田では、粒剤による防除も可能である。病虫害防除指針などを参考にして、各薬剤の散布適期に湛水散布を行う（湛水散布にあたっては、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項などを確認するとともに、止水期間を1週間程度とする。また、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努める）。なお、散布後も発生が多い場合は粉剤、水和剤などで追加防除を行う。

オ 水田周辺に出穂したイネ科雑草が多いほ場では、カメムシ類が多発する可能性が高いので、特に注意が必要である。

6 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月30日現在、現地ほ場における発生は平年より少ない。

イ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年より少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

現在、本種を対象とした防除は必要ない。しかし、ほ場間差が大きいため、発生が多いほ場では、幼虫発生初期（8月第2～3半旬頃）に病虫害防除指針などを参考にして粉剤などを散布する。なお、粒剤で防除する場合は、発蛾最盛期（8月上旬頃）に散布を行う。

7 フタオビコヤガ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月30日現在、現地ほ場における発生は平年より少ない。

イ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年より少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 早生品種栽培ほ場で発生が多い場合は、穂ばらみ期～穂揃い期に防除を行う。なお、この時期は他の病虫害の防除時期と重なるので、本種にも登録のある殺虫殺菌剤などによって同時防除を行う。

イ 中生品種等、8月中旬以降に出穂するほ場では、本種の発生状況に注意し、要防除水準（暫定版：次の①～③の条件をすべて満たす場合、①発生の主体が1. 2cm以上の幼虫、②被害株率90%以上、③食害葉面積率10～20%以上）を超えた場合は、直ちに防除を行う。

[ダイズ]

1 紫斑病

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 大豆の成熟期は平年並と見込まれることから、本病の発生時期は平年並と予想される。

イ 向こう3か月の気象予報から、本病の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

病虫害防除指針などを参考にして、開花期の25～30日後に水和剤を使用して防除を行う。粉剤を使用する場合は、開花期の15～20日後とその7～10日後の2回散布する。

2 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 6～7月下旬までのフェロモントラップによる総誘殺数は、平年よりやや多い。
- イ これまでの発生経過及び気象経過から、若齢幼虫による被害は平年並の8月中旬以降に発生し始めると予想される。
- ウ これまでの発生状況、現在のダイズの生育状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 夏季の高温乾燥条件で多発しやすい。
- イ 若齢幼虫は集団で葉裏の葉肉を食害するために、表皮が残り白変葉となる。発生初期の防除は、白変葉の発生か所を中心に、捕殺（葉ごとの切除）あるいは粉剤又は水和剤などのスポット散布が有効である。
- ウ 老齢幼虫に対する薬剤の効果は不十分であるため、早期発見と早期防除に努める。

3 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、予察灯におけるイチモンジカメムシ、アオクサカメムシ及びホソヘリカメムシの総誘殺数は平年よりやや少ない。
- イ 大豆の開花期は平年並と予想されることから、本種の発生時期は平年並と予想される。
- ウ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

病虫害防除指針などを参考にして、開花期の25～30日後と、その10日後に、粉剤又は水和剤を使用して防除を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生量	平年並
-----	-----

(2) 予報の根拠

- ア 7月16～20日に行った県内巡回調査の結果、新梢葉の平均発病葉率は5.5%（平年：4.2%）と平年並であり、平均発病果率は1.1%（平年：2.3%）と平年に比べて低かった。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 新梢葉及び収穫果実の発病を防ぐため、収穫前の薬剤散布を徹底する。
- イ 発病した果実は、園外で土中に埋めるなどして速やかに処分する。

ウ 薬剤は、8月上旬にアリエッティC水和剤800倍液など、8月中旬にアミスター10フロアブル1,500倍液又はストロビードライフフロアブル3,000倍液などを散布する。

2 ハダニ類（カンザワハダニ、クワオオハダニ、ナミハダニ）

（1）予報の内容

発生量 やや多い

（2）予報の根拠

ア 7月28、29日に行った県内巡回調査の結果、ハダニ類の発生量は、一部地点で平年に比べてやや多かった。

イ 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、慣行防除体系）におけるナミハダニの10葉当たりの寄生個体数は、0.4頭（平年：0.1頭）と平年に比べてやや多い。

ウ 向こう1か月の気象予報から、ハダニ類の発生に好適な条件になると予想され、発生量はやや多いと予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 例年、ハダニ類の密度は、梅雨明け以後の高温乾燥条件下で急激に高まるので、1葉当たりの成虫数1頭を目安に防除を行う。

イ 発生密度が高い園では、散布量を増やし、丁寧に薬剤散布する。

ウ ハダニ類は、種類によって薬剤効果が異なるので、種類を十分に見極める。また、薬剤の散布にあたっては、連用を避けて、輪番散布する。

エ 薬剤は、ダニゲッターフロアブル2,000倍液、スターマイトフロアブル2,000倍液、コロマイト乳剤1,500倍、マイトコーネフロアブル1,500倍液などを使用する。

3 シンクイムシ類

（1）予報の内容

発生時期 平年並～やや早い

発生量 平年並

（2）予報の根拠

ア 7月中旬現在、現地9地点のフェロモントラップにおけるシンクイムシ類の発生時期は平年並～やや早く、発生量は、一部地点でやや多いものの、全般的に平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第4回成虫は、平年並～やや早い8月上～中旬頃、モモシンクイガの第2回成虫は、平年並の8月上旬頃から増加し、発生量は平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 発生盛期となる7月以降、シンクイムシ類は連続的に発生するため、定期的な薬剤散布により発生密度を低下させる。

イ 発生が多い園ではシペルメトリン水和剤（アグロスリン水和剤2,000倍液又はイカズチWDG1,500倍液）、テルスターフロアブル3,000倍液などを使用する。

ウ 裸果（受粉樹に残っている果実など）はシンクイムシ類の発生源となるので、早急に除去する。

[カ キ]

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 昨年の発生量は平年並であったため、越冬菌密度は平年並と予想される。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

8月上旬にスコア顆粒水和剤3,000倍液など、8月下旬にストロビードライフフロアブル3,000倍液などを散布する。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 昨年の発生量は平年並であり、越冬伝染源量は平年並と予想される。

イ これまでに一部の現地ほ場において、新梢における発病が認められた。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 8月上旬にスコア顆粒水和剤3,000倍液など、8月下旬にストロビードライフフロアブル3,000倍液などを散布する。

イ 緑枝の硬化が進んでおり、枝への感染は春に比べて起こりにくくなっている。今後は、二次伸びの緑枝部位と果実への感染が中心となるため、ほ場の観察をしっかりと行う。

ウ 発病が認められた新梢や果実は必ず切除して、園外に持ち出す。

3 カキノヘタムシガ

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月第5半旬現在、県予察ほ場（河原試験地）の予察灯における本種の誘殺数は平年並で、発生時期はやや早い。

イ 近年、被害が少ない。

ウ これまでの気象経過および向こう1か月の気象予報から、第2回成虫の発生盛期は平年に比べてやや早い7月下旬頃で、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

8月上旬にスミチオン水和剤40の1,200倍液などを散布する。多発園では8月中旬頃にアグロスリン水和剤2,000倍液などを追加散布する。なお、スミチオン水和剤40は収穫30日前までに散布する。

[果樹共通（ナシ、カキ、ブドウ、リンゴ、モモ）]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月中旬現在、予察灯および集合フェロモントラップにおけるカメムシ類の誘殺数は、平年並～やや少ない。

イ 7月中旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、ナシ‘ゴールド二十世紀’、無袋・殺虫剤無散布）において、カメムシ類の果実被害は確認されていない。

ウ 7月28日に行った県内巡回調査の結果、カメムシ類の果実被害は確認されなかった。

エ 向こう1か月の気象予報から、カメムシ類の加害活動に好適な条件になると考えられ、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 8月以降、第2世代成虫の発生時期となるため、果樹園への飛来が増加する恐れがある。

イ 被害や飛来状況は、ほ場間差が大きいため、園内外をこまめに見回り早期発見に努め、被害果実やカメムシ類の発生が多い場合は早急に防除を行う。

ウ 防除は、カメムシ類が飛来する夕方か早朝が効果的である。また、移動性が高いため、広域的な防除に努める。

エ 薬剤は樹種ごとの防除暦を参考とする。

オ 樹種によっては収穫間近となっているので、農薬の使用基準を遵守する。

野 菜

[ネギ]

1 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は高温多湿で発病が助長される。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ネギに傷がつくような無理な土寄せや追肥を行うと発病が助長されるので避ける。

イ ナレート水和剤1，000倍液、スターナ水和剤2，000倍、ヨネポン水和剤500倍、コサイドDF1，000倍液、Zボルドー500倍液などを7～10日間隔で2～3回散布する。

2 白絹病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。
- イ 本病は高温多湿で発病が助長される。
- ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

8月に発病がみられる場合は、モンカットフロアブル40の2, 000倍液などを株元散布する。

3 黒斑病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。
- イ 本病は気温が25℃前後で、降雨が多い場合に多発する。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 根傷み、肥料不足になると発病しやすいので、肥培管理に注意する。
- イ 薬剤は、ダコニール1000の1, 000倍液、ポリベリン水和剤1, 500倍液などを予防散布する。発病後は、ロブラール水和剤1, 000倍液などを散布する。

4 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや少ない。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 土寄せ時にはダントツ粒剤6kg/10aの株元散布、ベストガード粒剤6kg/10aの株元処理を行う。
- イ 散布剤はアグロスリン乳剤2, 000倍液、ディアナSC2, 500～5, 000倍液、ファインセーブフロアブル2, 000倍液、グレーシア乳剤2, 000～3, 000倍液などを散布する。また、ジノテフラン水溶剤(アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤)400倍液0.4L/m²の株元灌注も有効である。

5 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 土寄せ時にはダントツ粒剤6kg/10aの株元散布、ベストガード粒剤6kg/10aの株元処理を行う。
- イ 散布剤ではハチハチ乳剤1, 000倍液、ディアナSC2, 500～5, 000倍液、ファインセーブフロアブル1, 000～2, 000倍液、グ

レーシア乳剤2, 000～3, 000倍液などを散布する。また、ジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）400倍液0.4L/m²の株元灌注も有効である。

ウ 同系統の薬剤を連用すると効果が低下する恐れがあるので、ローテーション散布に努める。

6 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地ほ場（米子市）におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並であるが、前世代の誘殺数は平年に比べ多かった。また、県予察ほ場（園芸試験場）におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。

イ 現地調査ほ場における幼虫数は10株あたり0頭（平年：0頭/10株）であり、発生量は平年並であった。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 現在幼虫の発生がみられるほ場では、早急に防除を行う。

イ 防除適期は幼虫の若齢期で、この時期を逃すと防除が困難となる。防除薬剤は、プレオフロアブル1, 000倍液、マッチ乳剤2, 000倍液、ディアナSC2, 500～5, 000倍液、グレーシア乳剤2, 000～3, 000倍液などを散布する。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期	やや早い
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における発生時期はやや早く、発生量は平年並である。

イ 本病は降雨によって発病が増加する。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 茎葉が繁茂して薬液がかかりにくいので、丁寧に薬剤を散布する。

ウ 防除薬剤は、ダコニール1000の1, 000倍液、ジマンダイセン水和剤400～600倍液などを予防散布する。

2 ナガイモコガ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。

イ 県予察ほ場（園芸試験場）における幼虫の発生は確認されていない。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、アタブロン乳剤2,000倍液、フェニックス顆粒水和剤2,000～4,000倍液、プレバソフロアブル5の2,000倍液などを7～10日間隔で散布する。薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）におけるハダニ類の発生は確認されていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 高温乾燥条件で発生量が増加する。茎葉が繁茂して薬液がかかりにくいので、丁寧に薬剤を散布する。

イ 防除薬剤は、カンザワハダニ対象に、コテツフロアブル2,000倍液、ハダニ類対象にコロマイト乳剤1,000倍液などを使用する。

4 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除適期は幼虫の若齢期で、この時期を逃すと防除が困難となる。防除薬剤は、デルフィン顆粒水和剤1,000倍液などを使用する。

[キャベツ、ブロッコリー]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場（大山町）におけるフェロモントラップ誘殺数は平年と比べてやや多い。

イ 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 夏季の高温乾燥条件で多発しやすい。また、幼虫の中齢期以降は薬剤の効果が低下するので、若齢期の防除を徹底する。

イ キャベツの防除薬剤は、トルネードエースDF2, 000倍液、プレオフロアブル1, 000倍液、ファルコンフロアブル2, 000~4, 000倍液、グレーシア乳剤2, 000~3, 000倍液などを散布する。

ウ ブロッコリーの防除薬剤は、プレオフロアブル1, 000倍液、ファルコンフロアブル4, 000倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます (<http://www.famic.go.jp/>)。

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>



ホームページ2次元コード

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果(ナシのシンクイムシ類ほか)などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、御利用ください。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病虫害防除所

(TEL: 0857-53-1345、E-mail: boujyot@titan.ocn.ne.jp)

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

(TEL: 0857-53-0721、FAX: 0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

(TEL: 0858-37-4211、FAX: 0858-37-4822)

※ 予報第7号の発表は、8月25日(水)の予定です。